

毎日新聞
2012年(平成24年)9月17日(月) 13版
環境 22

再び注目される 田中正造の思想

足尾銅山事件と福島原発事故の類似性



田中正造（左）と菅井益郎（右）の足尾銅山事件に関する記事

日本初の公害とされる足尾銅山鉱毒事件の解決に奔走した政治家、田中正造（1841～1913年）が亡くなって来年でちょうど100年。鉱毒事件と東京電力福島第1原発事故の類似性に着目し、正造の思想や生き方から東日本大震災後の日本社会の在り方を探ろうと改めて注目が集まっている。

【足立旬子】

物質上、人工人為の進歩のみを以てせば社会は暗黒なり。デンキ開けて世間暗夜となれり。

亡くなる約1カ月前に正造が日記に書いた言葉だ。

菅井益郎・国学院大学教授（日本経済史）は「鉱毒事件を通して正造は、近代とは何か、技術とは何かを徹底的に考え抜いた。技術の進歩にのみ頼っている社会は人間を滅ぼす。技術をコントロールするモラルや哲学が必要と警鐘を鳴らした」と解説する。

電気が普及し始め、誰もが豊かになると期待した時代に、正造はなぜ現代文明を痛烈に批判したのか。

近代技術の粋を集めたはずの足尾銅山から流出した鉱毒は、渡良瀬川流域の土壌を汚染し、農作物や魚に甚大な被害を出した。政府は鉱毒を沈殿するため最下流地の谷中村を廃村し、遊水池とする計画を決定。正造は村民とともに最後まで抵抗したが、1906年に強制廃村された。明治初期に約2700人

◆没後100年に向けた主な行事◆

- ①29日＝「アースデイ田中正造」（午前10時、佐野市文化会館）。正造と環境問題をテーマにしたミニ学会やワークショップなど。午後3時から小出祐章・京大助教授の講演「正造さんと原子力」。1200円（前売り1000円）。高校生以下無料。
- ②10月4日＝田中正造100年講座（午後7時、佐野市勤労者会館会議室）。NHK市民大学「田中正造」の上映と講演。無料。
- ③10月28日＝「まんが田中正造」発売記念シンポジウム（午後1時、佐野市文化会館）。原作者の水根京子さんの講演など。無料。

※問い合わせは①②が「田中正造没後100年記念事業を推進する会」の取組会（☎0283・23・2896）、③は佐野市教委田中正造没後百年顕彰事業推進室（☎0283・22・8832）。



足尾銅山鉱毒事件と田中正造

明治時代、栃木県足尾町（現日光市）の足尾銅山から渡良瀬川に流れ込んだ鉱毒が、渡良瀬川を汚染し、農作物や魚に甚大な被害を与えた。田中正造は市議会などで鉱毒問題を追及し、1906年、明治天皇に謁見を試みた。

上の記事のテキスト版が以下にあります。

田中正造：再び注目される思想 足尾銅山事件と福島原発事故の類似性

2012.09.17 東京朝刊 22頁 科学面（全2,017字）

日本初の公害とされる足尾銅山鉱毒事件の解決に奔走した政治家、田中正造（1841～1913年）が亡くなって来年でちょうど100年。鉱毒事件と東京電力福島第1原発事故の類似性に着目し、正造の思想や生き方から東日本大震災後の日本社会の在り方を探ろうと改めて注目が集まっている。【足立旬子】

物質上、人工人為の進歩のみを以てせば社会は暗黒なり。デンキ開けて世間暗夜となれり。

亡くなる約1カ月前に正造が日記に書いた言葉だ。

菅井益郎・国学院大学教授（日本経済史）は「鉱毒事件を通して正造は、近代とは何か、技術とは何かを徹底的に考え抜いた。技術の進歩にのみ頼っている社会は人間を滅ぼす。技術をコントロールするモラルや哲学が必要と警鐘を鳴らした」と解説する。

電気が普及し始め、誰もが豊かになると期待した時代に、正造はなぜ現代文明を痛烈に批判したのか。

近代技術の粋を集めたはずの足尾銅山から流出した鉱毒は、渡良瀬川流域の土壌を汚染し、農作物や魚に甚大な被害を出した。政府は鉱毒を沈殿するため最下流地の谷中村を廃村し、遊水池とする計画を決定。正造は村民とともに最後まで抵抗したが、1906年に強制廃村された。明治初期に約2700人

いた村民は、遠くは北海道に集団移住を余儀なくされた。

福島第1原発事故後の昨年3月下旬、京大原子炉実験研のメンバーとともに放射能汚染調査のために福島県飯館村に入った菅井さんは「現代の谷中村ではないか」と感じたという。暮らしを豊かにするはずの文明が村民から日常を奪い、1年半たった今も多くの人が故郷に戻れない。

銅生産も、原発も「国策」として進められた。菅井さんは「日本は近代化を進めるために、何か問題があっても責任をとらない構造を作り、それが今も続く。鉾毒事件も原発事故も政府は責任をとらず、企業も『国策に沿った』と、責任をとらない。被害を受けるのは弱い立場の人々だ」と指摘する。

◇ ◇

鉾毒被害解決のため足尾銅山の「鉾業停止」を訴えた正造は、道半ばで亡くなった。命日の今日4日、生誕地、栃木県佐野市にある春日岡山惣宗寺（佐野厄よけ大師）で、百回忌の法要が営まれた。

真の文明は山を荒らさず 川を荒らさず 村を破らず 人を殺さざるべし＝1912年6月17日の日記

田中正造記念協会会長の岡部正英・佐野市長は、あいさつでこの言葉を取り上げ「人権や地方自治、平和への希求、環境を尊重する思想が凝縮されている」と述べた。

同市の市民団体などは「田中正造没後100年記念事業を進める会」を結成。今年4月には映画祭で正造の闘いを描いた映画「赤貧洗うがごとき」（池田博穂監督）を上映した。

民を殺すは国家を殺すなり 法をないがしろにするは国家をないがしろにするなり 皆自ら国を毀（こぼ）つなり 財用をみだり民を殺し法を乱してしかして亡びざるの国なし、これを如何（いかに）

1900年2月、鉾毒被害を訴えるため、東京へと請願のデモ行進に向かった農民たちを警察や憲兵が力で弾圧。政府が明治憲法で保障された請願権までも踏みにじったことに、正造が怒りに身を震わせて国会で演説する有名な「亡国演説」のシーンでは、約500人の観客が見入った。

同会では没後100年に向けさまざまなイベントを企画している。坂原辰男会長は「鉾毒事件の教訓が生かされないまま福島原発事故が起きた。自然や命、平和の大切さなど多くの教訓を次世代に引き継ぎたい」と話す。＝日記、演説は「真の文明は人を殺さず」（小松裕著、小学館）より

.....

■ことば

◇足尾銅山鉾毒事件と田中正造

明治時代、栃木県旧足尾町（現日光市）の足尾銅山から渡良瀬川に流れ込んだ鉾毒が下流域を汚染し、農業や漁業に甚大な被害を与えた。衆院議員だった田中正造は帝国議会で鉾毒問題を追及し、1901年、明治天皇に直訴を試みた。

.....

◆没後100年に向けた主な行事◆

<1>29日＝「アースデイ田中正造」（午前10時、佐野市文化会館）。正造と環境問題をテーマにしたミニ学習会やワークショップなど。午後3時から小出裕章・京大助教の講演「正造さんと原子力」。1200円（前売り1000円）。高校生以下無料。

<2>10月4日＝田中正造100年講座（午後7時、佐野市勤労者会館会議室）。NHK市民大学「田中正造」の上映と講義。無料。

<3>10月28日＝「まんが田中正造」発刊記念シンポジウム（午後1時、佐野市文化会館）。原作者の水樹涼子さんの講演など。無料。

※問い合わせは<1><2>が「田中正造没後100年記念事業を進める会」の坂原会長（電話0283・23・2896）、<3>は佐野市教委田中正造翁没後百年顕彰事業推進室（電話0283・22・8832）。 毎日新聞

記者の目：田中正造没後100年＝足立旬子（科学環境部）

毎日新聞 2013.09.12 東京朝刊 10頁 内政面（全1,866字）

◇生き方や思想、再評価

「公害の原点」と呼ばれる栃木県・足尾銅山の鉱毒事件で、被害者救済に半生をささげた政治家、田中正造（1841～1913年）が亡くなって今年でちょうど100年。

「真の文明は、山を荒らさず、川を荒らさず、村を破らず、人を殺さざるべし」

「デンキ開けて世間暗夜（あんや）となれり」

経済成長優先の近代文明を鋭く批判した言葉は、100年たっても色あせない。それどころか、東京電力福島第1原発事故後、正造の生き方や思想が再評価されている。

足尾銅山では、明治政府の富国強兵政策の下、外貨獲得の柱として銅の大増産が古河財閥によって進められた。山の木々は燃料用に伐採されたうえ、製錬時に出る有毒ガスのため枯れて、大雨のたび、鉱毒を含んだ土砂が下流の渡良瀬川沿岸に流れ出た。稲は立ち枯れ、魚は死滅、人々は健康被害に苦しんだ。沿岸住民は「押し出し」と呼ばれる請願運動を繰り返し、国会議員の正造は、国会で国に銅山の操業停止や対策を迫った。しかし、日露戦争に突き進む国は銅生産を優先したため、**天皇に直訴を試みた**。

盛り上がる世論を鎮めるため、国は鉱毒を沈殿させる名目で最下流域の旧谷中村（栃木県）に遊水地建設を計画した。正造は谷中村に移り住み、最期まで住民とともに反対運動を展開したが、村は強制的に破壊され、遠くは北海道へ移住を余儀なくされた。

鉱毒の被害地では、田畑の土の上と下を入れ替える「天地返し」や、汚染された表土を削り取って積み上げる「毒塚」が作られた。命を育む大地が汚染され、何の罪もない人々が故郷を追われた。弱い立場の人たちにしわ寄せがくる構図は原発事故も同じだ。

◇「自然を征服」は人間のおごり

正造が批判したのは、何でもカネに換算する価値観だ。科学技術の力で自然を征服できると考えるのは人間のおごりだと主張した。また「少しでも人の命に害があるものを、少しぐらいは良いと言うなよ」と、人命の尊重が何にも勝ると訴えた。軍備を全廃し、浮いた費用で世界中に若者を派遣し、外交による平和を構築することも唱えた。正造の思想に詳しい小松裕熊本大教授（日本近代史）は「ガンジーよりも早く、非暴力、不服従を実践した」と評価する。

だが、軍国主義の時代に戦争に反対し、経済成長ではなく、人命を優先せよとの正造の訴えを支持する人は一部だった。運動の資金調達に奔走している最中、渡良瀬川沿岸で倒れ、支援者の家で亡くなった。終焉（しゅうえん）の地の8畳間を代々保存する庭田隆次さん（79）は「今はたくさんの人が見学に来るが、見向きもされない時代も長かった」と話す。

正造の警句は生かされず、約50年後、今度は水俣病が発生した。化学工場のチッソ水俣工場（熊本県水俣市）で、廃液に含まれていた水銀が不知火海を汚染し、汚染された魚を多く食べた人たちが中枢神経を侵された。しかしチッソも国も生産を優先して対策を怠り、被害が拡大した。

2020年五輪は東京で開催されることが決まった。だが、福島第1原発の汚染水漏れについて「状況はコントロールされている」と説明した安倍晋三首相に、福島の漁業者や避難生活を送る人々から厳しい目が向けられていることも忘れてはならない。

◇国民にも向かう厳しいまなざし

私財を運動に投じた正造の全財産は、信玄袋に入った大日本帝国憲法と聖書、日記帳、石ころなどわずかだった。死の間際に「見舞客が大勢来ているようだが、うれしくも何ともない。正造に同情してくれるか知らないが、正造の事業に同情して来ている者は一人もない」と言い残したという。また「俺の書いたものを見るな。俺がやってきた行為を見よ」とも言っていた。

正造と鉋毒事件を研究する「渡良瀬川研究会」の赤上剛副代表（72）は「正造の事業とは鉋毒事件解決だけではない。憲法に基づき、国家が国民の生命と生活をきちんと守るよう、政治も含め社会の仕組みを変えようとした」と話す。

厳しいまなざしは、国民にも向けられた。採石のため山容が変わるほど削られた霊山「岩船山」（栃木県）を引き合いに「今の政治に今の国民を見る」と嘆いた。

今月4日の正造の命日に、出身地の栃木県佐野市で法要が営まれた。始まってすぐに雨が激しくなり、雷が何度も鳴り響いた。100年たって日本は経済大国になったが、山や川が荒らされ、人の命が軽んじられている。政治家は、国民は、何をやっているのかと、正造が叱咤（しった）しているように感じた。一人一人が何ができるかを考え、行動を起こせ――。雷鳴が胸に刺さった。

毎日新聞

本サービスの収録内容に関する著作権その他の権利は、毎日新聞社または各権利者に帰属します。無断転載など権利侵害となるご利用はお断りします。(C)THE MAINICHI NEWSPAPERS. All rights reserved.